

## メコン川流域の環境保全・開発と国際支援に関する国際シンポジウムを開催

シンポジウム実行委員会委員長・ACECC担当委員会幹事 岡村 未対（愛媛大学大学院）

土木学会とアジア土木学協会連合協議会（ACECC：Asian Civil Engineering Coordinating Council）の主催により、2009年4月9日にメコン川流域の環境保全・開発と国際支援に関する国際シンポジウム（International Symposium on Preservation and Development of Great Mekong Sub-region and International Support）を土木



写真1 会場風景

学会講堂にて開催した。

現在、ACECCでは土木学会が中心となって「メコン河流域相互開発に関する技術委員会（以下、メコンTTC）」委員長・日下部治（東京工業大学教授）のTTC活動を行っている。本シンポジウムはこのTTC活動の一環であり、土木学会のACECC担当委員会が主体となり、土木学会とACECCの主催、（独）土木研究所 水災害・リスクマネジメント国際センターと山梨大学G-COEプログラム「アジア域での流域総合水管理研究教育の展開」との共催で行ったものである。

### メコンTTC会議

本シンポジウムの前日にはメコンTTC会議が土木学会会議室で行われた。TTC会議へは、カンボジア、ラオス、ミャンマー、タイからのシンポジウム海外招聘者らが参加し、ACECCの活動概要の説明、メコンTTC活動の概要説明の後、メコンTTC活動の一環として国際シンポジウムを開催することの意義を確認した。今後も積極的なメコンTTC活動を継続するとともに、2010年8月にオーストラリア・

シドニーで開催される、第5回アジア土木学術国際会議（CECAR）にて特別フォーラムを開催するなどして、その成果を広く発信することが合意された。

### シンポジウムの概要

アジア有数の国際河川メコン川流域は、社会基盤、教育インフラ整備の国際支援と、経済成長を見越した海外投資が継続している一方、世界有数の生物多様性と文化遺産を有しており、国際支援・海外投資と調和ある継続可能な発展が模索されている。本シンポジウムは、土木学会とACECCが主催し、環境・文化保全、流域開発、人材育成、防災などの講演と討議を通じ、河川流域の活用・管理に関する国際協力のあり方について理解を深めることを目的としたものである。

シンポジウムは、栢原英郎・土木学会会長（シンポジウム当時）と堀越研一・ACECC担当委員会委員長の開会挨拶で始まり、丹保憲仁・北海道大学元学長（元土木学会会長）が「世界の水資源」と題した特別講演で、世界の水資源の偏在と現在の危機的状況、新しい水の世紀に向けてエネルギーと資源消費を抑えた水利用システムの必要性を説かれた。続いて、「キャパシティビルディングと国際支援」、「流域の世界遺産保全と国際支援」、「流域開発、防災と国際支援」と題した三つのセッションで、流域国から5名（タイ、ラオス、カンボジア、ミャンマー）と日本から5名の講演者による講演と、それらに対する討議が行われた。



写真2 講演者との写真撮影

「キャパシティビルディングと国際支援」のセッションでは、メコン川の流量の再現と予測が可能な分布型水循環モデルと、現地実務者・研究者の教育プログラム「ヴァーチャルアカデミー」の活動、流域各国で活動する機関や組織の人材育成プログラムの現状と課題などが紹介された。

続く「流域の世界遺産保全と国際支援」のセッションでは、貧困地区における観光事業を通じて貧困の軽減と文化自然遺産の保護を目指すユネスコのプロジェクトが紹介された。また、世界遺産地区では急激な観光客の増加による経済的恩恵と同時に、負の影響も受

ける。文化自然遺産の保全と開発の調和、および持続的な発展のための情報通信技術が紹介された。

「流域開発、防災と国際支援」のセッションでは、情報がさわめて少ない中国における状況の報告に始まり、貿易・サービス・工業・観光などの経済活動を活性化し自由経済圏を創設するための流域国連携による「経済回廊」の進捗状況とその影響について講演された。また、土木研究所 ICHARM が行っている地域の水災害に対する防災力向上に資する技術支援の体制、および洪水予警報のための最新のパッケージソフトウェアが紹介された。

さらに、日下部教授から ACECC、およびメコンICの設立の経緯と活動の概要が紹介さ

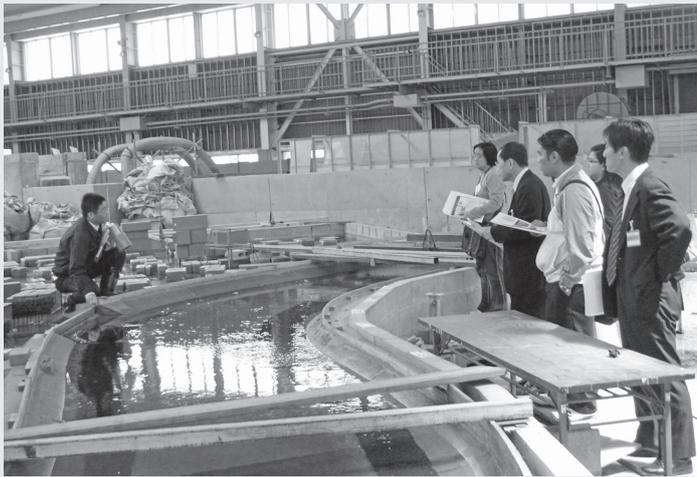


写真3 海外からの講演者を対象に翌日行われた、国総研・土木研究所(つくば)へのポスト・シンポジウムツアー

れ、また、メコン地域が日本を含むいくつかの国からの投資により既に自律的に発展しており、経済回廊が完成する2015年の次のフェーズを見据えることの重要性が指摘された。最後に、ACECC担当委員会のJSC代表表・住吉幸彦氏の挨拶で閉会した。

本シンポジウムは、当初は2009年12月に2日間行われる予定であったが、タイ・バンコク国際空港封鎖の影響により海外から講演予定者の来日が困難となり、いったんは中止したものを、改めて会期を1日に短縮して行ったものである。講演者や参加者には多大な迷惑をおかけしたが、今回は会場がほぼ満員となる約140名の参加者を得た。流域

開発と保全の調和、文化と環境が調和した流域の発展、そのための人材教育と国際支援を、いわゆる土木の枠組みにとらわれずに考える大変良い機会であった。国際河川という概念がないわが国への情報伝達と情報共有、および新しいネットワークの形成のきっかけに少しでもなれば、本シンポジウムは大成功である。

最後に、本シンポジウムに対し助成を戴いた(財)河川環境管理財団・河川整備基金、山梨大学G・C・O・Eプログラムおよび公益信託土木学会学術交流基金ならびに、シンポジウムの実施にご尽力くださった関係各位に深甚なる謝意を表します。

土木学会誌 5月号 正誤表

土木学会誌 2009年5月号において誤りがございましたので、訂正してお詫びいたします。

個 所	正	誤
土木に見る数字 38頁 タイトル 2行目	1234 12 12345 1234	123 12 12345 1234